

日本植民地下の台湾新文学と魯迅（下）

——その受容の概観——

中 島 利 郎

Received Apr. 30. 1994.

3. 第三期（1932年～1937年）：

この期は台湾における文学活動が様々な形で展開し、創作発表も本格化する。以下、それらの諸相を簡述しておく。

第一には、各種の文芸団体の成立とその機関誌としての文芸雑誌類の相次ぐ創刊である。前述した第一期にもすでに張我軍「買彩票」、楊雲萍「光臨」、頼和「一杆秤仔」「鬪鬧熱」などの小説が単発的に発表されたが、その発表の場はおおむね『台湾民報』に限られていた。ところが、この期になると台湾人が主宰する文芸団体が相次いで組織され、その機関誌として文芸専門の雑誌が各種創刊される。いまその状況を列記すれば、以下の通りである。

1932年1月1日に先ず莊垂勝、周定山、頼和、洪炎秋らが中国語文芸雑誌『南音』を創刊した。次いで1933年3月20日、留日台湾学生、王白淵、蘇維熊、張文環、劉捷（郭天留）らが東京で台湾芸術研究会を組織し、同年7月15日機関誌『フォルモサ』（日・中両文）を創刊し、評論、詩、小説などの文芸を本格的に掲載した。また同年10月25日、台北にて郭秋生、黃得時、林克夫、廖漢臣らが台湾文学の健全な発展を目的とした台湾文芸協会を設立し、翌1934年7月15日、機関誌として中国語の純文芸雑誌『先発部隊』を発刊した（1935年1月6日『第一線』と改題発行、総督府の要請で日本語の原稿を掲載したが、いずれも一号で停刊）。そして1934年5月6日には、張深切、頼明弘らの提唱で第一回全島文芸大会が台中で挙行され、台湾文芸協会をも吸収して、台湾文芸連盟が成立する。その機関誌として『台湾文芸』（日・中両文）が11月5日に発行される。さらに1935年12月28日、台湾文芸連盟の運営方針等に不満を示した楊貴（達）が、独力で『台湾新文学』（日・中両文）を発刊することになる。

そして、これらの雑誌には日本植民地期の文学を代表するような台湾人作家の作品が、日本語および中国語で次々と発表された。いま小説に限って掲げてみると、『南音』には懶雲「惹事」、『フォルモサ』には張文環「みさを」、呉希聖「豚」、『第一線』には王錦江「夜雨」、朱点人「蟬」、『台湾文芸』には頼雲「善訟的人的故事」、張文環「父の要求」、楊華「薄命」、呂赫若「嵐の物語」、翁鬧「慧爺さん」、『台湾新文学』には楊達「水牛」、張文環「過重」、呂赫

若「行末の記」、吳濁流「どぶの緋鯉」などが掲載されている。前述した第一期を、かりに台湾文学の萌芽期とするならば、この期は成長期といえるであろう。

第二の特色は、台湾人作家たちの日本のプロレタリア系をはじめとする雑誌への登場である。その発端となったのは、楊逵の「新聞配達夫」が1934年10月にナウカ社発行の『文学評論』に掲載されたことである。これより楊逵は『文学評論』をはじめとし『新潮』や『文学案内』などに随筆や評論を発表して、日本でもその名が知られるようになった。楊逵に続いて同じく『文学評論』の1935年1月号に呂赫若の「牛車」が掲載され、また、頼和の「豊作」も楊逵の日本語訳で『文学案内』に、そして1937年には龍瑛宗の「パパイヤのある街」が、雑誌『改造』の懸賞創作に当選し4月号に掲載された。この他にも、張文環「父の顔」が『中央公論』の懸賞小説の佳作に入選したことが35年1月号の同誌に見えるし、また翁鬧の「憲爺さん」が改造社の『文芸』の選外佳作に選ばれた。これらの作品が日本の文学界で評価を受けたことは、台湾にも台湾人の文学が存在することを日本の作家や読者にアピールしたし、また台湾人作家にとっては、創作活動への大きな自信となったであろう。しかし、松永正義が「台湾文学の日本文壇への登場は、台湾文学の質的向上の結果であり、またプロレタリア文学者同志の連帯の成果である場合もあったが、同時にそれは、植民地支配の浸透と、大陸の文学動向からの逸脱の結果でもあったわけだ」①と指摘しているように、日本語によってしか文学的表現ができない年代が生れ、定着しつつあったことに注意しなくてはならないだろう。

第三には、以上に挙げた雑誌類を通して、日本経由で魯迅や他の中国の作家たちの動向が台湾に紹介されるようになることである。いまその目についたものをあげれば、中国の文壇の近況を報じたものには頼明弘訳の「中国文壇的近況」(1935. 5. 5『台湾文芸』2-5)や蔡嵩林の「中国文学的近況」(1935. 7. 1『台湾文芸』2-7)がある。前者は改造社の『文芸』35年4月号に掲載された森次勲著「支那文壇のこの頃」の中国語訳で、その頃の中国文壇を沈滞期ととらえ、プロレタリア文学の立場から近況を論じたものである。巻頭に訳者の言として「中国文学は台湾文学の母体：也是有着不解之縁。摄取消化中国文学精粹，是我們の共通要求～」とあり、この翻訳を掲載した意図を明言している。後者は前者と同様の視点に立ち、短文ながら当時の中国文壇の状況を極めて網羅的本格的に紹介したものである。他に雑誌『論語』の主張や『太白』の創刊を通して大衆語の問題に言及した魏晉の「最近中国文壇上の大衆語」(1935. 7. 1『台湾文芸』2-7)などがある。いずれも日本語の浸透により日本文学へ傾斜する台湾人に対して、台湾文学のアイデンティティを中国文学との紐帯で再認識させるために発表されたと考えてよい。

また、この時期に日本に亡命した郭沫若を、在京の台湾人たちが千葉の市川に訪問した記録である蔡嵩林の「郭沫若先生訪問記」(1934. 7. 15『先発部隊』)や頼明弘の「訪問郭沫若先生」(1935. 2. 1『台湾文芸』2-2)が発表されて、台湾の文学者たちに中国の文学界の

状況が身近にそして比較的詳細に伝わるようになった。先の蔡嵩林の「中国文学的近況」は郭沫若との対話に触発されて中国語に訳されたのかもしれない。

さらに1936年12月22日には、中国の現代作家として初めて郁達夫が日本からの帰途、朝日丸にて来台した。郁達夫の訪台は（その訪台の目的は不明）一週間という短期間で、滞在中は公式の行事で埋められていたが、その間の寸暇を縫って28日、呉新榮、郭水潭、徐清吉、趙啓明、莊松林らが台南の鉄道ホテルに郁達夫を訪問し、中国の文芸運動や作家の近況、郁達夫と郭沫若の関係、大衆語と中国語のラテン化問題などについて話を聞いている。その様子は、尚未央（莊松林）の「会郁達夫記」（1937. 1. 31『台湾新文学』2 = 2）に詳しい。そしてまた、この度の郁達夫の訪台について『台湾新文学』のこの号の「編輯後記」で、王錦江が「国宝的待遇の郁達夫氏走馬灯的観方で僅か一週間で台湾を去る。われわれの文学にも課甚の流意を払ってゐると言はれる。これを機縁に台湾の文学がもっと隣国に紹介されれば幸である」と述べており、中国の作家の訪台に対する台湾の作家の期待の高さがうかがわれる②。

以上に見るように、この時期は台湾人の文学活動が成長期に入り、各種の文芸雑誌が次々と創刊され、現象的には主に日本を経由して中国の文学や文学界の状況がそれらの雑誌を通して紹介されたことがわかる。

さて、ではこの時期には、どのような魯迅の作品が台湾に紹介されたのであろうか。以上の活発な台湾人作家たちの文学活動から察すれば、魯迅の作品も大量にこれらの雑誌に登載されたのではないかと考えられるが、実際にはそうではなかった。いま、管見の限りを以下に掲げる。（／以降は原作の初出などを掲げた）

「池邊」（エロシェンコ作・魯迅訳1932. 3. 14『南音』1 = 5 / 1921. 9. 24-26『晨報副刊』、後1922. 7 上海・商務印書館『愛羅先珂童話集』）

「魯迅自叙伝略」（1932. 9. 27『南音』1 = 11 / 1925. 6. 15『語絲』週刊31「ロシア語訳『阿Q正伝』序および著者自叙伝略」の「自叙伝略」部分。後1935. 5『集外集』）

「無題」〈詩〉（1933. 12. 30『フォルモサ』2 / 1933. 4. 1『現代』2-6 原載の「為了忘却的記念」中の七言律詩、後に1934. 3 上海・同文書店『南腔北調集』収。『フォルモサ』への転載は「上海新夜報所載民生疾苦詩選」から）

以上のように、魯迅の作品の紹介は第一期に比較して極端に少なくなり、まとまった作品の紹介は皆無になる。勿論管見の及ばないところで転載された作品があるのかもしれないが、当時発行された代表的な文芸雑誌には、上に掲げたもの以外は見当たらない。

「池邊」は、前述した同ジエロシェンコの作品「魚的悲哀」「狹的籠」と同様な意図で転載されたのであろう。二匹の蝶が沈む太陽を見て、「この世界が暗くなるのを見ておれず、世界を救おうと考えて太陽をかえそうと」太陽の元へ飛んで行こうとして溺死する話である。話の終盤で、蝶の死骸を見つけた中学の教師が「この蝶は、きっとこの島に住むのがいやになっ

て、向うの陸地にいきたかったのだろう。そして、こんな死にかたをした。人間は誰でも、自分にあたえられた地位をたのしみ、自分のもっているものに満足することが大切だ」と訓戒をのべ、それを傍らで聞いていた蝶に同情するお寺の小僧が「どんな地位もなく、なんにももたない人間は、いったいなにに満足したらいいのでしょうか」とたずねる場面は、当時の台湾人の気持ちを代弁しているようで象徴的である（引用は高杉一郎編『桃色の雲』より）。

「魯迅自叙伝略」は、魯迅自身の書いたものであるが、台湾における最初の伝記的紹介。「無題」詩は、柔石や胡也頻など銃殺された左連を記念した「為了忘却的紀念」中の「慣於長夜過春時～」で始まる七言律詩である。

では、この時期には台湾において魯迅の作品が読まれなくなったのかといえば、そうではない。この時期には日本による台湾の植民地政策も30年以上を経過し、台湾の青年の間には日本語が普及し、また多くの台湾人学生が日本に留学し、日本語の読み書きができる知識人が圧倒的に増えたのである。そして、前掲の台湾人作家の作品を見てもわかるように、文学創作においても、日本語が次第に主流になっていく時期なのである。そして、この頃の日本においては、魯迅の作品の翻訳や紹介が本格的に行われるようになった。たとえば、単行された訳書は1931年には松浦珪三『阿Q正伝』（9月、白楊社）、林守仁（山上正義）『支那小説集 阿Q正伝』（10月、四六書院）、32年には井上紅海『魯迅全集』（11月、改造社）、35年には佐藤春夫・増田渉『魯迅選集』（6月、岩波書店）、そして37年2月から6月にかけて茅盾・許景宋・胡風・内山完造・佐藤春夫を編集顧問に迎えて、改造社から全7巻の「大魯迅全集」が出版されており、その他の雑誌掲載の日本語訳を含めて魯迅の代表的な作品はほとんど読むことが可能となった。また、魯迅紹介の面でも1932年4月に『改造』に発表された増田渉の「魯迅伝」を中心に数々の紹介文が様々な雑誌に掲載されている。

したがって、日本語教育を経た留日台湾人学生を始めとする多くの台湾の知識人は、当然それらを読み、日本語を通じてその影響を受けた③。

一方、中国語原作の魯迅の作品は、台湾では講読できなかったのかというと、それは可能であった。この小文の巻頭に掲げた鍾理和の1957年10月30日の廖清秀宛の書簡に「～後來更由高雄嘉義等地購讀新小説。當時，隔岸的大陸上正是五四之後，新文學風起雲湧，像魯迅・巴金・老舍・茅盾・郁達夫等人的選集，在臺灣也可以買到。這些作品幾乎令我廢寢忘食事～」という記述があった。そして、鍾理和がこのように寢食を忘れて大陸の文学を耽読したのは、16歳の頃だといわれる。鍾理和が16歳の頃といえば1930年（昭和5年）前後である。植民地期の台湾で、正規のルートで魯迅の中国語原文の単行本が販売されていたとは考えられず、また前述したように、当時どのような経路で魯迅を含む大陸の中国語原文の新文学作品が、台湾に移入されていたかはわからないが、この時期においては、日本語使用に抵抗をしめす台湾の知識人や「祖国」の文学に興味を抱く作家たちは、魯迅などの作品を原文で、勿論そう多くはないが、密かにではあるがかなり自由に読んでいたと思われる。そして、日本語訳

であろうが中国語であろうが、彼らは正確にその文学の意味するところを捉らえていたことは、第一章で引用した楊雲萍の「所以對魯迅先生的眞價，比較當時的我國國內的大部份的人們，是比較的正確而切實的。～」という言葉からも伺える。

つまり、魯迅の作品は制約はあったとはいえ日本語訳を通じて、また中国語の原文で直接読むことがある程度可能になった。したがって、その作品の転載は必要でなくなり、上記のような状態になったと考えられるのである。このことは、魯迅の作品が単純に台湾に紹介されるという時期が終わり、台湾人作家の心奥で咀嚼され消化される時期になったことをも示している。勿論、それは当時の植民地下の台湾では表面に現れるものではなかったが、それだけに作家たちの心奥に澱のように沈澱し、彼らの文学営為に大きな影響を与えたであろう。

さて、魯迅の作品自体の掲載は、以上のような理由で少なくなったが、それに代わって魯迅自身についての紹介が本格的に行われるようになる。その主なものを挙げると次のようなものがある。

まず第一に、『南音』1-2（1932〈昭和7〉2.1）に掲載された撃雲「文芸時評・關於魯迅的消息」がある。この一文は、次のように始まっている。

自從蔣皇帝登極以來，中國鬧了好幾次的清共慘案。幾多有爲的左翼作家，殺頭的殺頭，投獄的投獄，其餘便是逃來逃去在亡命着。我們所敬愛的魯迅先生也是其中的一個。我却不知道魯迅是於何時左傾的，是左傾到什麼程度的。而且我對他的左傾也沒有感到特別的愛憎。不過我是很愛讀他的作品的一個平凡的讀者罷了。我們自從「壁下譯叢」——一九二九年出版——以來至今日完全不能接到他老人家的作品，所以很感到寂寞。

これを見ると、当時の台湾において魯迅および中国文字の消息がある程度正確に伝わっていることがわかる。初めの部分は、1927年4月12日の蒋介石の反共クデター以降、左連の五作家逮捕銃殺などのことであろうし、魯迅の左傾とは1930年3月「左連」参加を指している。また、1929年以降魯迅の作品に接することができなくなったことを嘆いているが、この言は1929年出版の『壁下譯叢』までの魯迅の作品は、台湾においても見ることが出来たことを示唆している。そして以上の文に続いて、昭和7年1月号『中央公論』所載の佐藤春夫訳「故郷」に付された解説「原作者に関する小記」に拠って、最近の日本における魯迅文学の紹介をし、まもなく発表されるであろう増田渉の「魯迅伝」に期待を寄せる旨が記されている。それは、当時の台湾の読書人が、菊池寛、武者小路実篤、谷崎潤一郎などの日本人作家の作品のみに「随喜之涙」を流すという傾向に危惧を覚え、増田の「魯迅伝」を読むことによって、民族のアイデンティティを再認識させようという意図があった。

そして、ほどなく増田渉の「魯迅伝」はかなりの伏せ字や削除を伴いながらも、雑誌『改造』（1934）4月号に発表され、それが頑鋏によって中国語に訳され『台湾文芸』に四回に分けて連載された（1934.12.18～35.4.1『台湾文芸』2-1～2-4）。台湾における魯迅の伝記の本格的な紹介である。といっても、日本においては『都新聞』に小田嶽夫の「魯迅のこ

と」(1931. 4)が掲載されたり、雑誌『満蒙』に魯迅紹介の記事が載ったりしたが、その紹介はやっと緒についたばかりで、本格的なものはやはり増田のこの「魯迅伝」が最初のものであったから、この時点においては魯迅の本格的な紹介は、日本内地と台湾ではそれほど隔たりがなかったわけである。

この翻訳掲載は、意外な副産物を生んだ。それは第一回目の訳文「魯迅伝」を見た郭沫若が『台湾文芸』宛てに「魯迅伝中の誤謬」(1935. 2. 1『台湾文芸』2-2)という抗議の一文を寄せて、増田の文章に事実誤認があると指摘したことだ。それは、以下の訳文の下線の部分についてであった。

他的聲名會像迅雷震驚了世界的，那是七八年前。他的「阿Q正傳」被翻譯於法國，而登載在羅曼盧蘭所主宰的「歐羅巴」的雜誌而起的。這一個大文豪的盧蘭，對他——魯迅特地寫了一篇很感激的批評，寄給中國去。然而很不幸！那篇歷史的々批評文學，因為落於和魯迅抗爭之「創造社」的手裏，所以受他毀棄，那就不得發表了。

これに対して郭沫若は、その頃の経緯を述べた上で「創造社決不曾接受過盧蘭的『那篇歷史的々批評文字』」と反論した。上記中国語引用部分の増田の日本語原文は以下の通りである。

魯迅の名が国内ばかりでなく、国外に知られるやうになつたのは彼の「阿Q正傳」が七八年ばかり前に、仏蘭西に訳されてそれがロマン・ローランの主宰してゐた雑誌「欧羅巴」に載つてからである。ロマン・ローランはそれに対する感激的批評を支那へ送つたが、それが恰も魯迅と対立、抗爭してゐた「創造社」の手にはいつたゝめ、握りつぶされて發表されなかつた。

郭の反論に対して増田は「『魯迅伝』についての言分」を『台湾文芸』2-3(1935. 3. 5)に寄せて「僕はローランが創造社に阿Q正傳の批評を寄せたとは言つてゐない。僕はローランの阿Q正傳評が中華に送られたが、それが創造社の手にはいつた云々と言つてゐます。言ふまでもなく『手にはいつた』といふ日本語は『接受』といふ中華語とは意味がちがひます(頑鋏君の訳文も『落於手裏』となつてゐます。)だから郭君に敢て全人格を以つて『創造社決不曾接受過盧蘭的「那篇歷史的々批評文學』』と『保障』してもらふ必要は毫もないのであります。まるで問題のポイントが外れてゐるからです云々」と応酬した。しかし、上記の訳文と原文を比較してみればわかるように、頑鋏の訳には意図的な増補や文意のとり違いがあつて、郭沫若からの再反論はなかつた。「魯迅伝」訳の第四回目完結が掲載された『台湾文芸』2-4(1935. 4. 1)の「編輯後記」に「問題となつた魯迅伝は本号で終りです。郭沫若先生の水落石出的原稿を寄与せられんことを読者から希望して居ります」とあり、現役の中国の大作家が『台湾文芸』誌上で論争することへの期待する気持ちが伺えるが、結局この論争は中断して終わってしまった。

次いで、『第一線』(1935. 1. 6)に黄得時「小説的人物描写」が載った。この一文は、小説には「事件」「人物」と「背景」の三つの描写があるが、最も重要な描写は「人物」の描写

であると論じ、「人物」の「外面描写」の例として魯迅訳「工人綏惠略夫（シェヴィリヨフ）」の一節を、そして「内面描写」に「阿Q正伝」三・四章より阿Qの性格描写を引用して「也許是我們的魯迅先生才能達到這麼完全的呀！」と称賛した。これは、当時の台湾の小説の描写が「事件」つまりストーリー中心に偏っていたことに対する批判でもあった。作者は文末を次のような言葉で締めくくっている。

在臺灣所有發表過的作品，大體是以「事件」爲中心。作者只求很多的問題——聘金廢止，迷信打破，婚姻自由，娼媒嫖解放以及蓄妾排斥——壓縮在一個作品裡，完全像「問題的展覽會」一樣，表面上弄得五花八門，鮮艷奪目，事實上却没有甚麼藝術的價值。作者自身，只汲々於事件的解剖進展和解決，再有甚麼時間能够去顧及性格的描寫？～今後望諸作家，對於人物描寫這方面，盡點工夫去研究，以完成我們貴臺灣的藝術殿堂吧！

この期の台湾の作家たちに最も衝撃を与えたのは、1936年（昭和11年）10月19日、魯迅が上海で亡くなったことである。魯迅の死はすぐさま台湾にも伝わり、同年11月発行の『台湾新文学』1-9（11,15）は、二篇の日本語の追悼文を掲載した。王詩琅の巻頭言「魯迅を恨む」④と黄得時「大文豪魯迅逝く」である⑤。

4. 第三期（1937年～）：

1937年（昭和12年）4月1日、台湾総督府は台湾での出版物に中国語の使用を禁止し、すべて日本語に限定した。そしてこれ以後、中国語で書かれた文学作品は雑誌面からもすべて姿を消し、当然ながら魯迅の作品の転載は勿論のこと、その紹介や動向を記す文もまったく見当たらなくなる。

この時期の台湾文学界の動きを、以下年表式に簡述してみる（西暦の19を省略）。

37年7月7日日中戦争始まる。

38年6月鍾理和（23歳）が抗日戦争に参加するために、大陸に渡った兄を追って満州へ向う。

40年1月1日西川満等、台湾文芸家協会を設立し、機関誌『文芸台湾』を発行。

41年4月19日皇民奉公会成立。5月27日台湾文芸家協会を離脱した張文環等が『台湾文学』を発行。9月周金波が『文芸台湾』に「志願兵」を発表。12月8日日本海軍、真珠湾を攻撃。

42年4月1日陸軍特別志願兵制実施。11月大東亜文学者大会開催（西川満・濱田隼雄・龍瑛宗・張文環参加）。

43年1月31日頼和逝去。7月1日陳火泉が『台湾文学』に「道」を発表。7月1日海軍特別志願兵制実施。8月25日第二回大東亜文学者大会開催（斎藤勇・楊雲萍・周金波参加）。この年末『文芸台湾』、『台湾文学』相次いで停刊。

44年5月1日台湾文学奉公会『台湾文芸』を発行（12月まで8冊）。9月24日台湾にも徴兵制実施。

以上に見るように台湾も、日中および日米の戦時下体制に組込まれ、当然のことながら魯迅を始めとする中国の文学を読むこと紹介することは勿論のこと、台湾人作家たちの創作発表にも著しい制限が加えられた。そして、かれらに代わって登場したのは、『文芸台湾』を中心とする日本人作家たちであった。また、「台湾の魯迅」と称され、生涯中国語での創作を貫いた頼和の死は、まるで台湾人作家の創作活動が終焉を迎えたことを示唆するような象徴的な出来事であった。そして、頼和の死の数日前に見舞に訪れた楊雲萍の記録「頼和氏追憶」(1943. 4. 5 『民俗台湾』 3 = 4) には「更に話がはづんで、魯迅の話となり、『北平箋譜』の話が出た。～暫くしてから、突如、氏は、我々のなした新文学運動は、すべて無駄になつたな、と叫んだ。僕は吃驚りして、氏を見守つた。氏は今まで臥て居た体の上半身を起し、左手で苦しむ心臓をおさへた」と、さらに象徴的な頼和の言葉が記録されており、ここに台湾人の手による新文学運動は終焉を迎えたのである⑥。

5. 結 論

台湾における魯迅の受容は、第一期においては祖国で起こった新文学運動の移入紹介に始まった。その頃の台湾は新文学は草創期であり、頼和や楊雲萍など若干の作品を除いては日本語の作品は勿論中国語の作品にもまだ見るべきものがなかった。しかし、そのことはかえってまだ日本文化や文学の影響を深刻に受けていないことであり、祖国中国の新文学の影響を蒙ることで文学の民族的自立を成しえる可能性のあったことを示していた。張我軍や蔡孝乾はそのような意識のもとに、魯迅の作品を文学を始めとする中国の新文学および文学理論を台湾に転載し紹介した。

しかし、第二期になると、日本語および日本文化の台湾への浸透は深まり、台湾人作家の中でも日本語で思考し、日本語で表現するものが多くなりつつあった。つまり、文学の表現言語としての中国語は、台湾より次第に遠ざかりつつあったのである。だが、台湾の作家たちは日本語および中国語を駆使して魯迅の作品を読み続けた。その影響は（頼和は例外として）具体的な創作や文学運動としては表面化はしなかったが、祖国中国の文学との紐帯として、また台湾人自身のアイデンティティの再認識として読まれたと言える。

そして第三期、戦時下の台湾において魯迅文学の受容は、現象的には消滅してしまう。それは台湾人の手による新文学運動の終焉でもあった。しかし、現象的には確かに消滅したかに見えた魯迅の文学は、日本の敗戦後一時的ではあったが、再び台湾作家の手に帰ったのである⑦。

注

①：松永正義外訳『彩鳳の夢 台湾現代小説選Ⅰ』（1984. 2. 1 研文出版）所収「〈解説〉台湾文学の歴史と個性」。

日本植民地下の台湾新文学と魯迅（下）

- ②：この時、台中では台湾の作家たちが一堂に会した郁達夫歓迎会が計画されたようであるが、台中での郁の滞在時間はなぜかわずか一時間余で、作家たちを失望させたと尚未央の訪問記にある。従って王錦江の「国家的待遇云々」という一句にもその失望の念が込められているようである。なお、郁達夫の訪台について論じたものに戴國輝「郁達夫訪台の周辺」（1972. 5. 1『中国』102）がある。
- ③：植民地期の台湾人作家楊逵が1983年の来日の折に残した「一台湾作家の七十七年——五十年ぶりの来日を機に語る」（1983. 1. 1. 河出書房新社『文芸』1月号、楊逵と内村剛介・戴國輝の対談）の中に、魯迅を読み始めた経緯を次のように記している。「～この入田さん（当時の楊逵の友人で在台日本人の警察官——筆者注）の遺品の中に、改造社版の『魯迅全集』があり、私は彼の本を託されたことで、魯迅を本格的に読むことができたんです」
- また、この楊逵の発言を受けて、台湾人が魯迅の著作に触れることの難しさを戴國輝氏が次のように述べている。「楊逵先生の読まれた、改造社版の『魯迅全集』のことですが、蘆溝橋事件の少しあとだったと思う。私の死んだ兄貴が、東京でこれを所持していたがゆえに、憲兵隊につかまっているんです。台湾の留学生には、東京においてすら、『魯迅全集』は禁書だった。ですから、台湾にこれを持ちこむのは、もっと難しかったと思うんです。入田春彦氏が『魯迅全集』を入手し、所持できたのは、やはり、日本人の一種の特権だったのではないのでしょうか」
- 鍾理和や黃得時は1930年（昭和4年）前後に台湾および日本で中文・日文訳の魯迅の作品を比較的容易に見ているので、上の戴氏の言から察すれば、蘆溝橋事件以降台湾人に対する魯迅閲読の禁が厳しくなったと思われる。
- ④：この文章は「一台湾作家の七十七年」（注②）などでも、楊逵が執筆したと思われるが、実際は王詩琅の執筆である（拙稿「雑誌『台湾新文学』中の魯迅の追悼文について」1982. 12. 31台湾文学研究会『台湾文学研究会会報』2）。
- ⑤：魯迅逝去に関しては、この他『台湾日日新報』（1936. 10. 23）に高桑末秀の「魯迅逝く」などがある。
- ⑥：なお、この期には『文芸首都』8-10に龍瑛宗のゴオゴリと魯迅の「狂人日記」を比較した短文「二つの『狂人日記』」（〈昭和15. 10執筆〉後1943〈昭和18〉12. 11盛興出版部「台湾文庫4」龍瑛宗『孤獨な蠹魚』収）がある。
- ⑦：日本敗戦直後の台湾文学と魯迅の関係については、下村作次郎「戦後初期台湾文壇と魯迅」（1994. 1. 31田畑書店、下村作次郎著『文学で読む台湾』）がある。

『岐阜教育大学紀要』第24集掲載「日本植民地下の台湾新文学と魯迅(上)」正誤表

- P 222-下3：1932年～1945年→1937年～1945年
P 224-下8：エロシェンコのいくつか→エロシェンコの「いくつか」
P 225-下7：「狹的籠（せまい檻）は→「狹的籠（せまい檻）」は
P 225-下4：その人間もまた→その虎もまた
P 225-下1：「魚的悲哀（魚の悲しみ）は→「魚的悲哀（魚の悲しみ）」は
P 226-上17：『台湾民報』での印陸新文学→『台湾民報』での大陸新文学
P 229-上14：『台湾』3 = 4 - 7 →『台湾』3 = 4 - 7）
P 231-上9：戴國揮→戴國輝
P 231-上11：藤原泉之→藤原泉三郎
P 231-下12：換言せが階級問題の→換言せば階級問題の
P 231-上17：七言律誌→七言律詩

- P 231-下11：（佐藤勝「文学評論」<昭和→（佐藤勝「文学評論」昭和
P 233-上 4：郭沫若「魯迅伝伝中の誤謬」→郭沫若「魯迅伝中の誤謬」
P 233-上 7：頑鋏訳→頑鋏訳
P 233-上14：蔡嵩林「中国文学的近況」（35. 5. 5『台湾文芸』 2-7）→蔡林「中国文学的近況」（35. 7. 1
『台湾文芸』 2-7）
P 233-上15：魏晉「最近中国文壇上的大衆語」（35. 5. 5『台湾文芸』 2-7）→魏晉「最近中国文壇上的大衆
語」（1935. 7. 1『台湾文芸』 2-7）
P 233-上16：「読郭沫若先生著『屈原』」（1935. →「読郭沫若先生著『屈原』」（1935.
P 233-下14：「髭魯迅を悼む」→「魯迅を悼む」
P 233-下 9：～課甚の注意を払ってゐる→課甚の注意を払ってゐる
P 234-上21：『孤独な蠹魚』→「孤独な蠹魚」
P 234-上 7：「鍾理和全集」卷⑦→「鍾理和全集」卷⑦